

2022年4月10日（日）

＜棕櫚の主日礼拝＞

宣 教 「エルサレム入城」

聖 書：マルコによる福音書 11章1節～13節

みなさん、おはようございます。

今日の聖書の個所には、主イエスが神の都と呼ばれたエルサレムの町に子ロバに乗って入城される有名な場面が記されています。

何度かお話ししたことはあるのですが、ドイツのアルプスの麓にあるオーバーアマガウ村では400年前から10年に一度キリスト受難劇が村人総出で行われています。今では5月ごろから半年間行われています。わたしも2010年にこの劇を観に行く機会が与えられました。

この劇はオーバーアマガウの村で今から1634年から10年に1度、400年近く行われている村人あげての聖書に基づくキリストの受難劇です。2020年に行われる予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大で今年に延期になっています。今なお、世界ではなお新型コロナウイルス感染の出口が見えない状況で今年の開催はどうなるかと気になっています。世界中から何十万人という方々が小さなこの村に劇を観るためにやって来られるのです。

そもそもこの劇の由来は、この村を襲ったペストの大流行に始まると言われます。

ペストでヨーロッパ中の多くの人々の尊い命が奪われました。この村の人々は神さまにペストの収束を祈ります。治まった暁には、「キリストの受難劇」をあなたに捧げますと約束祈りを捧げたということです。そして時が来てペストが収束後、村人たちは神さまとの約束通りこぞって受難劇を捧げたと言われています。最初は小さな劇だったようですが、いつしか世界中に伝わり今では何十万という人たちがこの村を訪ねて10年に一度、村人のあかちゃんから90歳の何千人という村人が捧げる劇を行い、キリストの受難を偲んでいるのです。

村から離れている人もこの時のために劇に参加したり、音楽演奏や衣装づくりや様々なことで関わられています。

その受難劇は、主イエスのエルサレム入場から始まります。受難週の日々イエス・キリストの苦しみ、宮清めや、ゲッセマネの祈り、弟子であるユダの裏切り、最後の晩餐の場面など、そしてイエスさまの十字架お場面のあります。

復活の出来事まで続きます。劇も、衣装も音楽や合唱もすべて村人たちで、その内容や技量も圧巻で感動しました。

今日の宣教の聖書個所は、エルサレム入城の場面です。

共に聖書のことばを通しての神さまの声に耳を傾けましょう。

◆エルサレムに迎えられる

1:一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、

2:言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、連れて来なさい。」

いよいよ主イエスは意を決して弟子たちと共に、エルサレムの町に近づかれます。エルサレムのすぐ近くにオリーブ山と呼ばれる山があり、ふもにはオリーブの木が植えられており、オリーブの園があります。ゲッセマネの園もそこにあります。オリーブ山の近くにベタニアという小さな村があります。

ちなみにベタニアという名の村は、イスラエルには二つあります。聖書の最後に聖書地図があり、そこに記されています。ベタニアという名の村は、エルサレムのすぐ近くの村と、ヨルダンを超えた東側にもある村です。今日の個所のベタニアはエルサレム近くの村で、イエスの親しかったマリアとマルタ姉妹と二人の弟であるラザロの住んでいた村だと思われます。イエスはこの村で以前、病気で死んだラザロを甦らされた出来事がヨハネによる福音書には記されています。主イエスの心なごまれる交わりのあるベタニアであったようです。ちなみにベタニアという言葉には、「悩む者の家」とか「貧しい者の家」という意味があります。そこがイエスの愛された家、憩いの家でもあったのです。今でも主イエス・キリストは、病などで悩む人々や貧しい人々の中にいてくださるのです。イエスは二人の弟子をその村に使わされます。

「向こうの村へ行きなさい。「村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、連れて来なさい。」と。

「村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろば」。古代イスラエルでは「ろば」は農作業や荷物の運搬に使われ、平和の象徴だと言われます。ちなみに馬は戦争の象徴です。

神の子イエスさまはエルサレムに入るのに、猛々しい馬ではなく、小さなろば、それも子どものろばに乗って入られたのです。

3:もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、

『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」

4:二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどこいた。

5:すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。

6:二人が、イエスの言われたとおりに話すと、許してくれた。

3 節の「主がお入り用なのです。」とは、イエスのことだと思われます。

イエスさまはこの日のために、あらかじめ用意をして頼んでおかれたのかもしれませんが。淡路島出身の「ちいろば」牧師こと故榎本保郎牧師が「主がお入り用なのです。」との言葉を大切にされ、生涯ご自身をイエスを乗せた子ろばにたとえて伝道に邁進されました。

さて、いよいよ主イエスはエルサレムの町に入城されます。

7:二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。

8:多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。

この光景は人々が王様を迎える時に行う姿でした。

「人が自分の服を道に敷き、」、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。王様などを迎える姿勢です。また「葉のついた枝」とは、今日、かの地域特有のナツメヤシの葉と枝と言われます。この話が日本に伝わった時、日本の聖書翻訳者はナツメヤシに似ている「棕櫚」と訳し、それが定着して主イエスがエルサレムに入場された日を記念して、「棕櫚の主日」とよばれるようになったようです。

学問的には、「棕櫚」は、ナツ目ヤシ科のシュロ属に属するそうです。

ちなみに、ナツメヤシの実は、とても美味しく、栄養が豊富な食べ物で今でも食されています。わたしもイスラエルに行った時に頂きました。ガイドさんの説明では「マリアさまも食べていました。」と言われていたことを思い出します。

さていよいよ、主イエスのエルサレム入城の場面です。

「9:そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。」

10:我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」とエルサレムの人々は叫んでイエスを迎え入れました。

この人々の歓声は、自分たちをローマ帝国支配の苦しみから解放してくれる王を迎える喜びの歓声のようです。「ホサナ」とは、「神よ、お救いください。」という意味があり、それがいつしか「バンザイ」という歓声になったようです。王は強く立派な姿の美しい馬に乗るのです。それが王のイメージでありシンボ

ルとなったのです。

しかし、わたしたちの主イエス、イエスさまは、ろば、それもろばの子に乗って神の都と呼ばれたエルサレムに入られたのです。

平和をあらわすろばに乗ってです。イエスさまは「平和の君」としてこの世に来てくださったのです。愛なる大いなる神さまから遣わされた神の独り子なのです。

その姿は、旧約聖書のゼカリヤ書に預言されているのです。

ゼカリヤ書 9 章 9 節～10 節 (p 1489)

このイエスさまを王として迎えたエルサレムの人々歓声は、後に「イエスを十字架につけよ。」という怒号に変わって行ったのです。人間の罪がいかにしつこく、暗くいものであるかを思われます。しかし、人の子、神の子、イエスさまはすべてをご存じて、神の救いの計画実現のためにご自身をすべて捧げてくださったのです。その苦しみと愛が胸に迫ります。

「イエスの十字架、わがためなり」「イエスの十字架われらのためなり、世界のためなり」と思われます。

11: こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

主イエスと弟子たちにとって厳しいエルサレムの町での一週間の日々が始まりました。神さまは愛する独り子イエスさまと弟子たちに、厳しい中でも憩いの場所であるベタニア村を備えてくださったのではないだろうか、と。今回、気づかせて頂きました。

神さまは、わたしたちが受けるどのような苦難、苦しみと悩みの中にも、憩いと平安を必ず与えてくださり、最善をなしてくださる方であることを思いつつイースターを持ち望みたいと願います。

主の平安を祈ります。